

絵本理解を深める教育方法の実践

——学生による絵本の翻訳を中心に——

Gaining Deeper Understanding About Picture Books Through an Educational Practice: The Translation of a Picture Book by Students

伊藤 美和子

Miwako Ito

研究の背景と目的

絵本の読み聞かせが広く普及し、各種調査が示しているように、新刊絵本の出版部数は増加している¹⁾。保育の場において保育者が新しい絵本に触れる機会が多くなったが、多数の絵本の中から優れた絵本を選ぶことは容易ではない。絵本は絵画的要素と文学的要素を含む芸術作品である上、昔話絵本、創作絵本、科学絵本、写真絵本と種類が多い。質の高い絵本を選ぶ力を養うことは保育者養成課程の課題の一つである。

学生の絵本の選書力を養うためのこれまでの取り組みについては伊藤（2020）で述べたが²⁾、本稿の背景と目的を明確にするため、再度、簡単に触れておきたい。

保育者養成校において絵本の選書力を高める方法の1つに多読がある。多読は、松尾（2016）³⁾や中村・三浦・諏訪（2005）⁴⁾のように100冊レベルの絵本を学生に読んでもらう方法である。多読の効果は確かにあり、さまざまな絵本を実際に読むことは選書力向上に必要不可欠である。一方、三好（2017）⁵⁾や杉本（2016）⁶⁾のように、同一絵本の読み聞かせに反復して取り組んだり、絵本を鑑賞する時間を計画的に確保したりという試みもある。絵本の良さをじっくり味わうという体験は、もっと読みたいという動機づけとなる。

しかし、現在の絵本の出版状況を考慮すると、これらの方法だけで絵本の選書力を育成できるとはいえない。昨今、斬新な発想の絵本や、今まで紹介されてこなかった欧米以外の国や地域の絵本が次々と出版されている。保育者は、過去に出会った本だけでなく、普遍的価値をもちつつ今を生きるこどもの心に響く絵本を新たに見出さなければならない。未来に向けた選書力が必要とされているといえよう。

こうした背景から筆者は、「育ち合い」という観点にたち、絵本の選書力を育む授業づくりを見直

すことにした。佐伯 (2007)⁷⁾ は、こどもだけでなく、保護者や保育者も保育に関わりながら、喜びや苦勞を共有し、共により良い保育の場をつくっていく「育ち合い」という観点を提示した。絵本の選書においても育ち合いの観点は重要だ。経験や視点、得意分野が異なる保育者同士が、絵本を薦めあったり、新しい絵本について感想や疑問を率直に述べあったりしながら、知見を共有し、こどもたちに届けるべき絵本を定めていく。絵本リストに頼ったものでも独善的なものでもなく、保育者自らが主体となり客観的に絵本を選ぶことで、選書力が身に付くのではないだろうか。

筆者は「育ち合い」の観点を取り入れた授業として、絵本の対話的な鑑賞方法を試みることにした。保育内容領域「言葉」と関係する授業において、対話的に絵本の絵と文章を分析・検討するという内容である。絵と文章の総合芸術である絵本は、絵と文章を同時に鑑賞するものであるが、対象となった学生は絵本の鑑賞経験が浅いため、絵と文章を分けて作品を吟味した方が効果的であることが予想された。そこで対話的鑑賞方法を、絵の対話的分析と言語表現の考察に分けて実践することにした。絵の分析については伊藤 (2020) において報告したので²⁾、本稿は言語表現の考察を扱う。

言語表現を主題とした対話的鑑賞の授業方法として、ここでは英語絵本の翻訳を試みる。翻訳を導入するのは、学生たちの注意を言語表現に集中させるためである。日本語は本研究の対象となった学生たちにとっては母語なので、日本の絵本の文章を分析対象にしても意識化されにくく、授業としても単調になりやすい。一方で、英語絵本の翻訳は学生にとってチャレンジングな課題である。翻訳を通して学生たちは、言葉の選択、一語一語の意味、音の響きなどあらゆる言語表現に対して敏感になることが期待できる。

具体的には、グループで英文絵本の翻訳を行い、自分たちの訳文と、翻訳家によって日本語に翻訳され発行されている同じ絵本の訳文と比較し、言語表現の考察を行ってもらおう。こうした授業方法が絵本理解を深めるのかを明らかにすることが本稿の目的である。

方 法

翻訳の教材として W. Nicholson 作 “Clever Bill” を選んだ⁸⁾。理由は3つある。1つ目の理由は “Clever Bill” は、話の展開が単純ながら勢いがあり、英語でも楽しみながら読めるからである。2つ目の理由は、“Clever Bill” には松岡享子・吉田新一訳『かしこいビル』⁹⁾ と椿原奈々子訳『おりこうなビル』¹⁰⁾ という2つの既訳書があり、自分たちの訳文と専門家の訳文との比較、専門家の訳文同士の比較が可能だからである。3つ目の理由は、事前の聞き取り調査で、クラス全員が当該絵本を原書でも日本語訳でも読んだ経験がないことが確認できたからである。

“Clever Bill” について簡単に説明しておこう。この絵本は初版が1926年、作者はイギリスの画家 William Nicholson である。物語は主人公の少女メリーがドーバーに住むおばの家に遊びに行くことから始まる。メリーは喜んで荷造りをするが、大事な兵隊の人形ビルを鞆に入れ忘れてしまう。置いていかれたビルは初めは涙にくれるが、その後、猛然と走って、メリーの乗る汽車に見事に追いつくというストーリーである。メリーの荷造り場面は明るくユーモラスに描かれ、ビルが全速力で

走る場面は勢いのある筆致で描かれている。

授業では“Clever Bill”を班ごとに翻訳し、1) 翻訳作業、2) 自分たちの訳文と『かしこいビル』と『おりこうなビル』の訳文との比較について、質問紙により調査した。手順は次のとおりである。

- 1) 学生は4人程度の班になり、“Clever Bill”を話し合いながら翻訳する。日本語の題名も自分たちで考えてつける。
- 2) 翻訳完成后、学生は既訳書『かしこいビル』と『おりこうなビル』を受け取り、これら2作品の訳文と自分たちの訳文を比較する。
- 3) 話し合いの終了後、質問紙に必要な事項を記入する。

時間的制約のため、翻訳の対象を絵本の第5場面以降とした。参考資料として翻訳対象箇所の英文と既訳書の訳文を本稿末に掲載した。訳文をつくる際は、①訳文を絵と調和させる、②原文のもつリズムを損なわないようにする、③幼児が理解できる文章にする、④漢字は使わない、という点に注意するよう参加者に促した。

調査協力者と調査実施時期

調査協力者は四年制私立大学の保育者養成課程に在籍し、保育内容領域「言葉」に関する専門科目を受講する3回生の学生31名である。Aクラス17名、Bクラス14名に協力してもらった。

調査実施時期は2019年12月である。1回目の授業で説明と翻訳作業に約45分をあて、1週間後の2回目の授業で訳文の比較と話し合い、質問紙の記入に約45分をあてた。

質問の内容

質問は以下のとおりである：1) 翻訳した感想、気が付いた点、難しかった点を記入してください；2) 自分の訳文と既訳書を比較して、気が付いた点を記入してください。班ごとの話し合いの課題は、「既訳書と自分たちの訳文を比較してください。どれが一番優れているかとその理由について話し合ってください。」であった。

倫理的配慮

調査協力者である学生には、研究目的を口頭で説明し、調査結果を保育研究に利用することについて書面で承諾を得た。

結 果

翻訳作業と訳文の比較をとおした学び

質問1と2に対する協力者31名分の回答文から、学生が着目した項目として10点を抽出した。A) 直訳的がかたい、B) こどもに分かる、C) 既訳書の文は自然である、D) 絵本らしくする工夫、

E) 絵との連携、F) 文のつながり方、流れの良さ、G) 一つ一つの言葉への着目、H) 表記上の工夫、I) リズム、J) 聞きとりやすさ、である。班で話し合いながら翻訳したせい、回答文には類似した表現が多くみられ、着目項目を挙げるのは比較的、容易であった。

回答文における着目項目と該当数をマトリックス図法で表わし、集計したものが表1である。一番左の列は回答の整理番号、一番上の行は着目項目を示している。項目に該当した場合に1を記入し、一番下の行に項目毎の回答数の合計を記載した。項目毎の該当数の合計をグラフ化したのが図1である。

図表から項目A～Dが回答の主要項目であることが確認できる。最も該当数が多かった項目は、A「直訳的でかたい」(21人、67.7%)である。既訳書と比較すると、自分たちの訳文が直訳的でかたいことに気づき、後続して、B「こどもに分かる」(19人、61.3%)、C「既訳書の文は自然である」(14人、45.2%)という内容の記述が多くみられた。「英語をそのまま訳すと言葉がかたくなってしまっているので、幼児に向けた言葉にしていくのが難しく感じた」(調査協力者4、以下、数字のみ記載)、「かたくなるしい訳になってしまうので、こどもでも理解出来るよう変えるのが難しかった」(9)、「自分で訳した文章は少し直訳的で幼児向けの絵本としては少し難しい表現になってしまった部分が

表1 回答文における着目項目と該当数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
	た直 い訳 的 で か	分こ かど もに	るは既 自訳 然書 の あ文	す絵 る本 工ら 夫し く	絵 との 連 携	良方 さ文 の つ な ぎ	着言 目一 つ つ の	工表 夫記 上 の	リ ズ ム	や聞 すき と り
1	1		1							
2	1	1			1		1			
3						1	1	1		
4	1	1	1							
5		1	1	1					1	
6		1					1			
7	1	1			1		1			
8		1		1	1		1			
9	1	1	1	1	1					
10	1	1	1	1	1					
11	1		1			1	1			1
12		1		1						1
13			1	1				1		
14	1	1				1	1			
15	1	1					1			
16									1	
17	1	1	1			1				
18	1	1		1						
19	1	1	1	1	1	1				
20			1	1	1					
21	1			1						
22	1		1		1		1			
23	1		1				1			
24	1	1				1	1			
25	1	1					1	1		
26	1					1	1			
27		1					1	1		
28				1			1			
29	1	1	1				1			
30	1		1			1				
31	1			1	1		1			
計(割合)	21(67.7%)	19(61.3%)	14(45.2%)	12(38.7%)	9(29.0%)	8(25.8%)	17(54.8%)	4(12.9%)	2(6.5%)	2(6.5%)

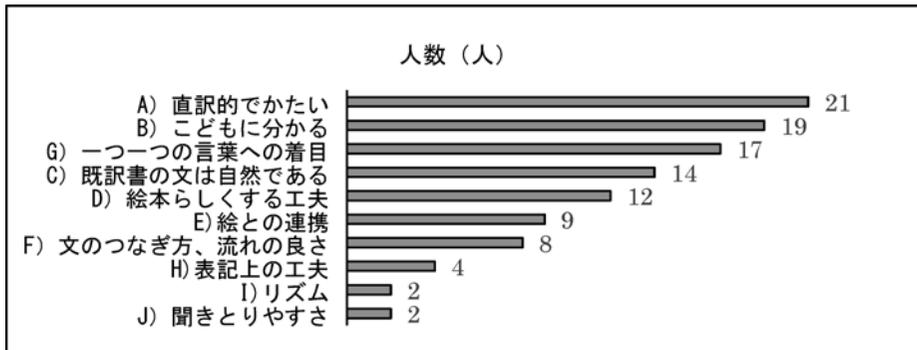


図1 回答文における着目項目と該当人数

あったが、既訳はより自然な言い回し、文章の流れで、聞いていて内容が入ってきやすいと感じた」(11) 等である。

項目Bに類似する項目がD「絵本らしくする工夫」(12人、38.7%)である。「難しい日本語が出てきて、絵本のことばにすることが難しい」(10)、「絵本のように翻訳するのが難しかった」(21)という記述があった。絵本の言語表現のイメージは持っており、それに近づけたいと思っているが、実際に具体的な文として具体化させることに困難を感じているようであった。

より細かい点への着目を表しているのが、E～Jである。まず、G「一つ一つの言葉への着目」(17人、54.8%)に注目したい。10項目中3番目に該当数が多かった項目である。「何回も連続して続く接続詞があったので、どうすればこどもたちに伝わりやすく訳すことができるのか考えるのが難しかった」(23)、「andが多い文で、同じandでも、〔既訳では〕「なんと」「よりによって」と違う言葉に訳されていました」(7、〔〕は伊藤による補足)、「〔既訳書ではsheを〕「彼女は」ではなく、「メリーは」というように名前で訳されていた」(24)という記述がみられた。

この絵本において“and”は複数の意味で使われており、文脈によってどの日本語をあてるか慎重に検討しなければならない語である。また“she”を「彼女」と訳してしまうと、幼児には理解しにくい。こどもに伝わり、絵と調和し、話の流れを損なわないように、と複数の側面を考慮する必要がある。絵本の翻訳は、一つ一つの言葉の効果について考えさせるのに有効であることが確認できる。

項目E「絵との連携」(9人、29.0%)では、「絵に合うような言葉さがしがむずかしかった」(20)、「絵の雰囲気から読み取る感性も大切」(22)のように、絵との相互関係を意識しながら文をつくることが意識されていることがうかがえる。

項目F「文のつながり方、流れの良さ」(8人、25.8%)は、「次のページの展開が気になるような接続詞の置き方」(26)、「日本語でも話の流れや絵に合わせて使った方がこどもが分かりやすい絵本になる」(19)という記述のように、文と文、場面と場面の関係性を考慮した記述である。

項目H「表記上の工夫」(4人、12.9%)とは、異なる色や大きさの文字、記号「“ ”」や「!」等の効果についての気づきを示している。項目I「リズム」(2人、6.5%)とJ「聞きとりやすさ」(2人、6.5%)からは、学生が、こどもにとっては絵本のことばは「読むもの」ではなく、「聞くも

の」であることを意識していることが分かる。

総合的に判断すると、翻訳に従事した学生たちは、かたい文章ではこどもに伝わらず、自然で絵と調和した流れのよい文が望ましいこと、絵本らしい文章に仕上げるためには一つ一つの言語表現を十分に吟味する必要があることを認識するようになったといえる。

既訳書『かしこいビル』、『おりこうなビル』、自分たちの訳文の比較

翻訳終了後、班ごとに『かしこいビル』、『おりこうなビル』、自分たちの訳文を比較し、どの訳文が最も優れているかとその理由について話し合ってもらった。AとBの2クラスのうち、Aクラスでは話し合いの結果を口頭で発表し、全体で共有した。Bクラスでは全体の話し合いはせず、班ごとに話し合い、分析内容の記録を提出してもらった。所要時間は各クラスとも20分程度であった。

Aクラスにおける全体討論：「かしこい」か「おりこう」か Aクラスでは、4班とも自分たちの訳文の題名を「かしこいビル」としていた。そして最も良いと思う訳書も『かしこいビル』であった。『かしこいビル』を支持する理由として、『かしこいビル』の文章が、「分かりやすい」、「流れがよい」、「勢いがある」が挙げられていた。

全体討論の中ではタイトルの「かしこい」と「おりこう」の違いに議論が集中した。「かしこい」と「おりこう」の違いについて以下のような意見がでた。

- ・「かしこい」ほうが頭がいい感じ。
- ・「おりこう」は普段、あまり使わない。
- ・「おりこう」は小さい子にしか使わないのではないか。
- ・勇敢なビルに合うのは、「おりこう」ではなく「かしこい」である。

途中で関西地方では「かしこい」をよく使うのではないかと教員が問いかけたこともあり、「おりこう」、「かしこい」以外に、「だめ」と「あかん」の違いなど、保育現場で頻繁に使用する言葉について話し合われた。

Bクラスにおける分析内容の記録 Bクラスで班ごとに話し合った内容は表2のとおりである。自分たちの訳文には3つの班とも「かしこいビル」という題名を付けていた。筆者が話し合いを観察したところ、どの班も同じように場面ごとに作品を対照させながら話し合い、『かしこいビル』と『おりこうなビル』の訳文の特徴を適切に捉えているようにみえた。

しかし、話し合い内容の記録は異なった。表2のとおり、B班が細部まで記述しており、分析の客観性が認められる。原書の“first”にあてる日本語によって、読み手に与える印象が異なることに着目できている。兵隊の人形の“Bill Davis”が、『かしこいビル』では「ビル」、『おりこうなビル』では「ビル・デイス」と訳されていること、“I”が『かしこいビル』では「あたし」、『おりこうなビル』では「わたし」と訳されていることも分析している。また、場面14~17にかけて連続する接続詞“and”と場面18~21にかけて連続する動詞の過去形“ran”をどう訳すかが作品の流れを特徴づけるのだが、その点をB班は適切に捉えていたことが確認できる。

考察 Bクラスの3つの班のうちA班とB班は『かしこいビル』を、C班は『おりこうなビル』

表2 Bクラスにおける訳文の分析内容の記録

	『かしこいビル』	『おりこうなビル』	学生による訳文
A班	・話し言葉や自分の身近な言葉が使われており、親しみやすい。	・直訳的。いつも使わない表現が多く、小学生向け。 ・「このように」と、絵に注目できる言葉が使われている。	・学生訳は『おりこうなビル』に近い。 ・かしこまった表現が多かったのもう少し親しみやすい言葉遣いできたと思う。
	『かしこいビル』の方が良い。		
B班	・(場面10) まず	・(場面10) さいしょ	・(場面10) さいしょ
	・(場面14) しまいにじかんがなくなつて、とにかくめちゃくちゃにおしこんで、ふたをしました。そしたら—	・(場面14) とうとうじかんがなくなりました。メリーはおおいそぎつめこみました。ところが、	・(場面14) さいごにメリーはそれらをつめなければならなかったのも、いそぎました。
	・(場面15、16) なんと!!! なんと!!!!	・(場面15、16) なんと!!! よりよって!!!!	・(場面15、16) そして!!!そして!!!!
	・(場面18~21) ビルはおきあがって、はしって、はしって、ぜんそくりよくではしって、とうとう—	・(場面18~21) ビルははしりました。はしりにはしり、なおもはしって、ちからのかぎりはしりました。そうして、	・(場面18~21) ビルははしって、はしってのはしって、どんどんはしって
	・(場面17) ビルをいれわすれてしまったのです。かわいそうに! でも—	・(場面17) ビル・デビスをわすれたのです。かわいそうなビル。けれど、	・(場面17) かわいそうなビルをわすれてしまいました。しかし、
	・あたし ・子どもに内容が伝わりやすい。	・わたし 言葉が一つ一つ丁寧。	
『かしこいビル』の方が良い。			
C班	・いきおいのある表現	・丁寧な表現。	・一文が長い。
	・メリーが話しているような話し言葉。	・文字数が多い。	・既訳では、“and” など同じ接続詞でも、物語が盛り上がるように表現を変えていた。
	・(場面15、16) 強調したい部分で文字の色が変えられている。		
	・(場面23) びっくりマークが書き加えられていた。		
『おりこうなビル』の方が良い。表現が丁寧で分かりやすいと思ったから。			

() は筆者による補足。

を最も良いと結論づけた。Aクラスと合わせると、7班のうち6つの班が『かしこいビル』を選び、BクラスのC班だけが『おりこうなビル』を支持することになった。C班は、どちらが良いか迷っていたが、『おりこうなビル』はやや難しい言いまわしはあるものの説明が丁寧で、子どもに分かりやすいのではないかと判断した。少数派となったがC班も訳文を検討して結論を出していたのである。

Bクラスではどの班も班活動では一つ一つの場面を対照させ、違いとその効果について話し合っていた。しかし細部の分析内容を記録に残したのはB班だけであった。話し合いの内容を文字化することで、論点が具体的になり、議論が活性化する。結果として作品の本質的価値を理解したり、新たな解釈を生み出したりすることにつながる。検討内容の記録の方法と指導は、今後、検討すべき課題として取り組みたい。

Aクラスでは、クラス全体でどの訳が最も良いか、意見をだしあった。タイトルが論点となり、具体的でわかりやすかったせいか、次々と意見が出された。全班が同じ意見で議論が進んだが、一方で、異なる意見を排除してしまった可能性もある。クラス全体の討論では、全員同じ意見になっ

でも、教員の側が意識的に異なる観点を提示したり、対案をだしたりして、多角的に作品を捉えるよう促し、個々人の意見や疑問を率直に出し合えるよう工夫する必要があるだろう。

AクラスとBクラスでは話し合いの方法を変えてみたが、どちらのクラスでも訳文の比較の有効性が確認できた。保育者志望の学生がグループで訳文の比較を行うことは、保育者を自分の視点ではなくこどもの視点に立たせ、こどもに届く言語表現とはどのようなものか考えさせる効果があることが確認できた。

結 語

本研究の目的は、絵本の対話的鑑賞方法としての翻訳作業と訳文の比較が学生の絵本理解を深めることを明らかにすることであった。保育者養成課程に在籍する学生を対象に、グループで絵本“Clever Bill”を翻訳し、自分たちの訳文と翻訳家による翻訳文とを比較してもらった。その結果、学生たちは、こどもに分かりやすく伝わりやすい表現、絵と文の調和、一つ一つの言葉の意味とニュアンスの重要性等を認識するに至った。学生は絵本の言語表現を特徴づけるさまざまな項目に注意を向け、絵本についての理解を深めていることが、調査により確認できた。

一方、班での討論の過程と方法では課題がみつかった。冒頭で述べた「育ち合い」の観点からすれば、教員自身の学生への関わり方にも一層、工夫できる点があるだろう。本稿で明らかになった課題をふまえて教育方法を改善し、今後も絵本の選書力育成に取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) 畑中梨沙 (2020). 拡張する絵本の世界(前編). KDDI総合研究所. (<https://www.kddi-research.jp/topics/2020/022802.html>) (2021年9月3日14時30分 URL取得); 国際こども図書館の蔵書からみる国内の児童図書館の出版状況. 国際こども図書館. (<https://www.kodomo.go.jp/info/publication/index.html>) (2021年9月1日14時05分 URL取得).
- 2) 伊藤美和子 (2020). 保育者養成課程における絵本理解を深める教育方法の実践: 絵の分析と絵本作家による講演を中心に. 豊岡短期大学論集, 17, 85-94.
- 3) 松尾裕美 (2016). 保育者を目指す学生の絵本への認識. 福岡女子短期大紀要, 81, 1-8.
- 4) 中村由紀子・三浦正雄・諏訪英広 (2005). 保育士養成課程における「絵本100冊読み」実践の成果と課題: A短期大学幼児教育学科卒業生に対する質問紙調査をもとにして. 山陽学園短期大学紀要, 36, 61-74.
- 5) 三好伸子 (2017). 学生の姿から考察する絵本の効果: 保育者養成校授業でどのように使用するべきか. 甲南女子大学研究紀要, 53, (人間科学編), 89-96.
- 6) 杉本真理子 (2016). 大学生と「絵本」を読む(その1): ことばを大切に、互いの交流から「学び」を深める授業の試み. 帝京大学文学部教育学科紀要, 33, 49-74.
- 7) 佐伯 胖 (2007). 人間発達の軸としての「共感」. 佐伯 胖 (編), 共感: 育ち合う保育の中で, 1-38. ミネルヴァ書房.

- 8) Nicholson, W. (2016). *Clever Bill*. Egmont Books. (初版は1926年であるが、本稿では入手可能な Egmont Books社2016年初版を利用)。
- 9) ニコルソン, W. (1982). *かしこいビル* (松岡享子・吉田新一, 訳). ペンギン社.
- 10) ニコルソン, W. (2011). *おりこうなビル* (椿原奈々子, 訳). 童話館出版.

参考資料

“Clever Bill” 第5場面以降の英文原書と既訳書の対照

場面	“Clever Bill”	『かしこいビル』	『おりこうなビル』
5	“O! I must take Apple Grey,” said Mary, “and my gloves with the thumbs...and	「そうだ、あしげのアップルをつれていかなくちや。」とメリーはいいました。「それから、あたしのけがわのついたてぶくろと、それから	かようびになりました。「さあ、いよいよね！うまのアップルはつれていくわ」と、メリーはいいました。」わたしのけがわつきのてぶくろも。それに、
6	dear Susan and my trumpet ...and	スーザンと、ふえと、それから	かわいいスーザン。わたしのトランペット。それから、
7	I might need my shoes and my blue teapot and my brush with name on it,	くつもいるわ。ティーポットもいるし、あたしのなまえのついたブラシもいる。	それから……くつもいるわ。ティーポットもね。それとヘア・ブラシ。わたしのなまえがかいてあるんですけど。
8	and of course I can't leave clever Bill Davis and my purse.”	それから、もちろんかしこいビルはおいていくわけにはいかないし、おさいふもいるわ。」—そこで、	そうよ。もちろん、おりこうなビル・デイビスをおいてけぼりにするわけにはいかないわ。そう、おさいふも。
9	So she brought the box her father gave her...and	メリーは、おとうさんにもらったトランクをだし、	メリーは、おとうさんにもらったりょうこうカバンをとりだしました。
10	first she packed it this way...and	まず、こうつめてみました。それから、	さいしょ、メリーは、このようにつめました。
11	then that way...and	こうしてみても、それから、	つぎには、このようにつめてみました。
12	then she packed them that way...and	こんどはこうやって、それから、	そのあと、このようにつめかえました。
13	then this	またこうやってみましたが、	やっぱり、このようにつめなおしました。
14	and at last she was in such a hurry that she had to pack them anyway...and!	しまいにじかんがなくなって、とにかくめちやくちやおしこんで、ふたをしました。そうしたら—	とうとう、じかんがなくなりました。メリーは、おおいそぎつめこみました。ところが！
15	and!!	なんと！！(大きな赤字で表記)	なんと！！(大きな文字で表記)
16	and!!!	なんと！！！！(大きな青字で表記)	よりによって！！！！(大きな文字で表記)
17	and she fogot poor Bill Davis, but	ビルをいれわすれたのです。かわいそうに！でも—	ビル・デイビスをわすれたのです。かわいそうなビル。けれど、
18	he ran	ビルはおきあがって、	ビルははしりました。
19	and he ran	はしって、	はしりにはしり、
20	and he ran	はしって、	なおもはしって、
21	and he ran so fast...that	ぜんそくりょくではしって、とうとう—	ちからのかぎりはしりました。そうして、
22	he was just in time to meet her train at Dover.	ドーバーえきで、メリーにおいつきました。	メリーが、ドーバーのえきについたちょうどそのとき、ビルもドーバーのえきについたのです。
23	“Clever Bill”	「かしこいビル！」	「おりこうなビル」

資料中における文章は、引用文献8)、9)、10)、いずれも5～23頁から引用。

